

煙突と柳

小川未明

青空文庫

冬の晴れた日のことであります。太陽は、いつになく機嫌のいい顔を見せました。下界のどんなものでも、太陽のこの機嫌のいい顔を見たものは、みんな、気持ちがはればれとして喜ばないものはなかつたのであります。

太陽は、だれに対しても差別なく、いつでも、喜んで話し相手になつたからであります。ちようどこのとき、太陽は、ちよろちよると、白い煙をあげている煙突に向かつて、

「このごろは、なかなかお忙しいようだが、おもしろいことがありますか。」と、にこやかに笑つて、太陽は聞きました。

煙突は、いつもは、黙つて、陰気な顔をしてふさいでいたの

ですが、このときばかりは、なんとなく、うれしそうにはしゃいでいました。

「おかげさまで、このごろは、毎日まいにちおもしろいめをしています。ほんとうに、私は、わたししあわせでございます。」と、煙突は答こたえました。

「どんなおもしろいことか、聞きかしてくれないか。」と、太陽たいようはいいました。すると、煙突は、つぎのような意味いみのことをば物語ものがたったのであります。

——ほんとうに私は、どんなに寂さびしかったかしのれない。長い間ながあいだ、みんなは私わたしを振り向むいて見てくれるものもなかったのです。私は、わたし終いちにちあめ日雨にさらされていることもありました。また、真まつ暗くらな晩ばん、

風かぜに吹ふきつけられて、身みをゆすぶられていることもありました。

もし、こうして、だれもかまわんでいたら、私わたしの体からだには、いくつも小ちいさな穴あながあいてしまつて、もはや永えい久きゆうに、役やくに立たたなくなるであらうと悲かなしんでいました。

虫むしや鳥とりなどは、私わたしをばかにしました。鳥とりは、よく私わたしの頭あたまの上うえに止とまつて、内うちをのぞいて見みながら、

「こんなにきたなくては、巢すも造つくれない。」といいました。

くもは、わがままかつてに、私わたしの内うち側がわにも、また外そと側がわにも網あみを張はりました。もとより私わたしに、一ごん言ことの断ことわりもいたしません。それほど、みんなは私わたしをばかにしたのです。

そのうちに、夏なつもゆき、秋あきがきました。秋あきも末すえになると、ある

ひ日のこと、ペンキ屋がきて私を美しく、てかてかと塗りました。

私は、思いがけないりっぱな着物を着たのでうれしかった。また二、三年は、どんな雨や、風にも負けないと思つたからです。

冬がくると、急に私は、人間から大事にされました。私の内部のすすや、あのくもの巢などは、きれいにはらわれたのです。それからというものは、なんとという私の生活の変わり方であつたでしようか。

毎日、毎日、私は、いやというほど、石炭を腹に入れます。もはや寒い、ひもじい思いなんかというものは、夢にも忘れられたような気がします。そして、私は、どんな寒い日でも、暖かに、風や、雨と戦うことができます。人々は、私の働き

ちからと力とをはじめて認めてくれたように、私の下で燃え上がる火のそばによつてきます。そして、そこに、どんな光景が見られるとお思いですか？

「いや、私は、屋根の上ばかりしか見ることができない。家の中のことはまったくわからない。どうか聞かしてもらいたい。」と、太陽はいいました。

——このごろのにぎやかなことつたらありません。うちのお嬢さんは、毎日ピアノを弾いてうたっています。先生のところへいって、教わっているおもしろい唄をいい声でうたいながら、ダンスのまねをします。そこへ坊ちゃんが入ってくると、おつかけまわったりして、へやのうちを騒ぎます。しかし、じきに二人

は、仲なかよくなつて、暖炉だんろの前に腰こしをかけて、チョコレートやネーブルを食たべながらお話をはなしします。

夜よるになると、華はなやかな電燈でんとうが、へやの中なかを昼間ひるまのように明あかる

く照てらします。そこへ、女おんなのお客きやくさまがあると、へやじゅうは香こ

水うすいの匂においでいっぱいになります。テーブルの上うえには、カーネー

ションや、リリーや、らんはなの花もなどが盛もられて、それらの草花くさばな

の香気こうきも混まじつて、なんともいえない、ちようど南なんごく国の花はな園ぞの

にいったときのような感かんじをさせるのであります。

私わたしは、いろいろの人ひとたちの旅りょこう行はなしの話はなしや、芝居しばいの話はなしや、音おんがく樂がく

の話はなしなどを聞ききます。雨あめや、風かぜにいじめられていた私わたしは、こうし

ていま蘇よみがえ生えっています。まだ、私わたしは、これから先さきにも、いろいろ

ろのおもしろい有り様を見たり、話を聞くことができましょう—
—。

「どうか、お日さま、私のお願いをきいてください。こうして、
わたしはいま幸福な身の上でありますけれど、春がき、夏にもなる
と、ふたたびだれも私を振り向いてくれません。私の腹の中はい
つも空っぽになります。そして、下の暖炉の中には紙くずが詰ま
ります。どうか私のお願いをきいてください。いつまでも冬のつ
づきますように……。なるだけ、あなたは、おそく歩いてくださ
るように。」と、煙突は、太陽に、身の上話をした後で、頼
みました。

太陽は、あいかわらず、機嫌よくにこにここと笑っていました。

このとき、煙突の傍らに、しよんぼりと立っていた一本の柳の木がありました。いままで黙って煙突のいうことを聞いていましたが、急に太陽に向かつて、訴えるようになりました。

「お日さま、どうか私のいうことをお聞きください。私は、この寒さで、根が凍って枯れそうになっています。そのうえ、私は、もう年をとっていて元気がありません。私のわずかばかり残っている枝は、毎夜の霜に傷められて、こんなに力がなくなっています。それだから私は、お日さまにお願いするのではありません：
：。

私は、ここに立って、もう長い間、いろいろこの世の中の有り様というものを見つけてしまつたような気がします。もう枯れ

てしまつても、惜しい命とは思いません。それですから私自身
 のためにお願ひするのでありません。

お日さまが、毎日、西の空へ沈みなさる時分から、一日も欠
 かしたことなく、私の下に立つて夕刊を売る子供を、お日さま
 はごらんになつたことはありませんか。

まだ、やつと十か、十一になつたばかりであります。ひどい雨
 の降らないかぎりには、風の吹く晩にも、私の下に立つて鈴を鳴ら
 して夕刊を売っています。その子の手は、家にいる病身な
 ははおや母親を助けて働くので、私の枝が霜に痛んでいるよりも、もつ
 と風と霜とに傷んでいます。寒い、寒い日には、はれあがつた手
 の甲から血がにじんでいます。

その子の家には、妹があります。弟があります。父親は、死んでしまつてないために、病身の母親は、じつとしてゐることもできずに内職をしています。母親の働くだけでは子供らを養育していくことは、むずかしいのです。それでいちばん上の、この男の子は、こうして毎日、町の四つ角にそびえてゐる私の下に立つて、通る人々に夕刊を売つてゐるのであります。

ある日のこと、どういふものか新聞がいつものように売れなかつたのです。けれど、売らなければならなかつた。それで、いつまでも子供は、私の下に立つて、鈴を鳴らしながら立つていました。

そこへ、青白い顔をした、やつれた母親がやってきました。

——あまり帰りが遅いので、どうしたかと思つてやつてきた。

もう学校へいかなければならぬ時刻だ。私がかわるから、早く、これから帰つて、飯を食べて学校へいきなさい——。

こういつて、母親が子供の小さな肩から下げているかごをはずして、自分がそれを今度は肩にかけて鈴を鳴らしたのであります。

お日さま、私はこのやさしい子供がかわいそうでなりません。早く暖かになつて、そして、花の咲く時節になつたならばと思つています。どうか、早く歩いてください。」と、柳の木は申しました。

太陽たいようは、にこやかに、うなずきながら柳やなぎの木のきいうことを聞きいていました。そして、どちらのいうことが、正ただしいとも、正ただしくないとも答こたえませんでした。

その明あくる日ひ、太陽たいようは、よほど深ふかく考かんえ事ごとがあるとみえて、
終いちにち日かお、顔みを見せませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「芸術自由教育」

1921（大正10）年3月

※表題は底本では、「煙突《えんとつ》と柳《やなぎ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

煙突と柳

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>